

# 太宰府の文化財

231

## 絵が描かれた甕棺

高さ 97cm  
口徑 69cm  
弥生時代 国分一丁目出土



▲甕棺（復元後）

甕棺というのは約2000年前の弥生時代に主に北部九州で使われたお墓の形式です。大形の甕をお棺に使っているのが甕棺と呼ばれています。地域や時期によって甕の形、口へり、胴部の文様などに変化があるので、それが甕棺が

作られた時代を考える手掛りになります。甕棺墓は集落に近い所に共同墓地として作られ、何十年あるいは百年を越えて作り続けられることもあります。写真の甕棺が見つかった所も弥生時代前期の末から中期



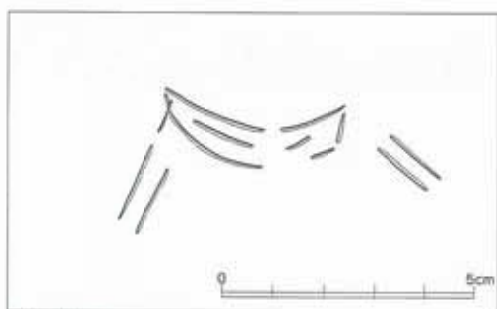
▲甕棺の出土状況

後半までの約2000年にわたって墓地が営まれています。その中でこの甕棺はこの墓地で一番古いものです。形は金海式と呼ばれるもので、韓国の釜山の近くの金海郡の金海貝塚から出土した甕棺に由来しています。そしてこの甕棺には、もう一つ注目すべきことがあります。それは、胴部中ほどに動物と思われる線刻画が描かれているのです。つぶれて出土したので、絵が描かれている部分も割れていて、つなぎ合わせましたが、残念ながら頭の部分がはつきりしません。



▲線刻画が描かれている部分

しかし、右下の図のように4本の足と胴体を思わせる線刻はわかり、それから何か動物だろうと想像しています。では何でしょうか。ある調査によると弥生の絵画土器の約半数は鹿の絵で、他に建物、鳥、人の絵を加えると全体の9割に達するようで、動物の絵といえば鹿を描いたというのが一番可能性が高いように思われます。それでこの甕棺の動物もはつきりわかりませんが、鹿の可能性が大きいと言えましょうか。ちなみになぜ、こんなに鹿



▲線刻画実測図

が描かれるのかというと、鹿は地霊の象徴ともいわれ、毎年抜け替わる鹿の角に稲の発芽から取入れまでのサイクルを重ね合わせたという説もあります。ともかく弥生の人は鹿に特別の感情を抱いていたのでしよう。国分この甕棺の持ち主もどんな思いで鹿(?)の絵が描かれた甕棺の中に眠っていたのでしょうか。この甕棺は、9月5日まで「文化ふれあい館」で見ることが出来ます。

（考古部太宰府保存協会）

# 太宰府の文化財

232

## 太宰府天満宮の刀剣(一)

太刀とは腰に付ける時、刃先を下にする、つまり全体の形としては上に反った姿で腰に付けるものをいいます。刀は逆に刃先が上、付けた姿は刀の反りが下を向くものになっています。甲冑を付けて馬に乗っていた時代は反りが上を向いていないと邪魔でしたが、江戸時代など腰帯に直接、刀を差すようになると、体に沿って、反りを下に向けるようになります。

では太宰府天満宮所蔵のものを紹介しましょう。

### ① 太刀 行平 平安時代

長さ80・6 cm 反り3・5 cm

平安時代末期から鎌倉時代の初期にかけて活躍した豊後の刀工、行平が制作したといわれる太刀です。(写真①)

鐔(区)の近くに大日如来を表わす梵字まじと不動明王

のまじ、そして俱利伽羅龍の彫物をしています。(写真②)

行平の出自・経歴についてはいろいろな説があり、はっきりりしませんが、作風はこの太刀のように俱利伽羅龍や神仏を浮き彫りにするのが特徴。また「豊後国行平作」と銘を切ることが多いそうです。

この太刀は安元元年(1175)、平重盛が寄進したと伝えられています。

### ② 太刀 鎌倉時代

長さ74・4 cm 反り2・2 cm

刻まれている銘は「工し

か読めませんが、鞘には「工藤」と墨書されています。工藤については残念ながらこれ以上のことはわかりません。

以上のこととはわかりません。

### ③ 刀 江戸時代

長さ69・3 cm 反り1・3 cm

中心に「文久三 癸亥十二月吉日 長門国萩住永弘」

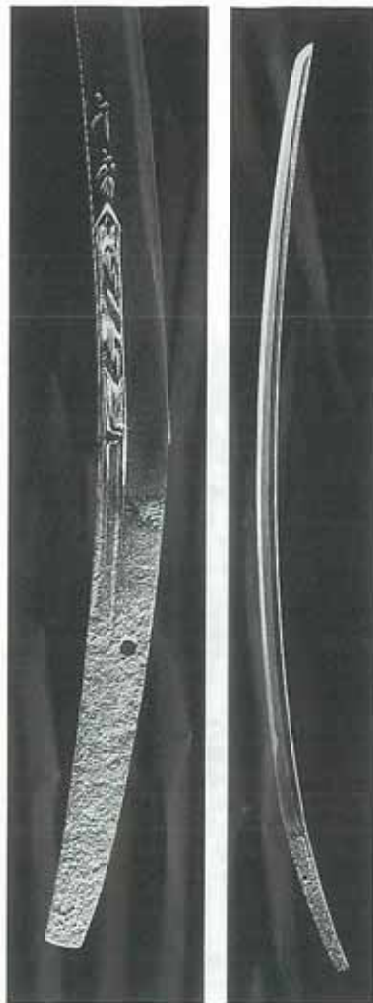
「二王直清」と刻まれています。これから、文久三年に萩に住む永弘が刀工の二王直清に造らせた刀だということがわかります。(写真③)

また白い鞘に「二王直清 三条公奉納」と墨書されています。

さで刀工の二王直清ですが、二王系の刀工は鎌倉中期から周防国(現在の山口県)で活動し、江戸時代は毛利家について長州萩に移りました。下関の長府に住んだ一派もあります。この直清は二代直清で幕末に活動しています。

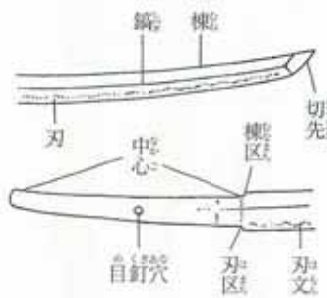
銘文などから、この刀は長州に落ちて来た三条実美に萩住の永弘がやはり萩住の刀工直清に刀を造らせて献上した、その刀を太宰府に移った後、あるいは京に戻る時、お礼に太宰府天満宮に奉納したという経緯が想像されます。

(財)古都太宰府保存協会



▲写真① 太刀 行平

▲写真② 太刀 行平 (彫物の部分)



▲刀の部位の名称



▲写真③ 刀

# 太宰府の文化財

(233)

## 太宰府天満宮の刀剣(二)

太宰府天満宮所蔵の刀剣類の2回目です。今回は信国系の刀工の作品です。

信国というのは京山城の刀工で南北朝時代ごろから活動しています。その3代目の信国の子が豊前国宇佐に下り、安心院吉門に仕えたのが、筑紫信国の始まりと言われています。そして吉門の吉をもらい、信国吉〇と称しました。

しかし、16世紀後半、安心院家が大夫家に亡ぼされたので、信国吉貞も浪々の身になります。黒田如水が豊前に入国してくると黒田家の抱え刀工となります。そして黒田家が筑前に移ると、吉貞も福岡城下の鍛冶町(現在の天神

三丁目あたり)に移り住み、幕末まで活動しています。今回は、太宰府天満宮に残る信国系の刀をご紹介します。

① 太刀 室町時代  
長さ76cm 反り2・2cm  
「信国」という銘と室町時代の作から刀工は京山城の信国と思われる。この太刀は黒田長政が寄進したと伝えられています。それは鞘に黒田家の家紋である藤巴紋を散らした衛府太刀拵になっているからでしょう。(写真①)

② 刀 江戸時代  
長さ89.2cm 反り2.6cm  
「奉納筑前源信国義直作」  
「心願成就文久三年十二月日」という中心に彫られた銘から、刀工は筑前信国の信国吉政系に属する幕末の刀工長兵衛義直と思われる。文久3年(1863)作者本人によつて奉納されています。(写真②)

③ 刀 江戸時代  
長さ68.7cm 反り2.1cm  
「筑前住源信国吉貞」の銘があるので、初代吉貞の三男吉助の子で、祖父の名を継いだ吉貞の作品だと思われる。明治35年(1902)に奉納されました。

④ 脇差 江戸時代  
長さ31.3cm 反り0.2cm  
「大自在天神」と梅木が彫られていることから、天神様ゆかりの刀であることがわかります。刀工は「原田助左衛門尉重包」で、「正徳四年(1714)重包42歳の時の作です。重包は初代吉貞の

二男で家を継いだ吉次の孫です。享保6年(1721)將軍吉宗の命で鍛えた刀の出来が良かったので一葉葵の紋を中心に刻むことを許された名工でもあります。正徳年間(1711~16)のころは宮崎八幡宮の境内に住み、原田姓を名乗っていました。

⑤ 脇差 江戸時代  
長さ46.2cm 反り1.2cm  
刀工は「筑前住源信国吉政」と刻まれています。吉政は②で紹介した吉政ですが、3代目まで吉政という名を使いますので、この脇差が何代目かということになります。恐らく2代目か3代目であろうということです。



▲写真① 太刀



▲写真① 太刀 (銘の部分)



▲写真② 刀



▲写真② 刀 (銘の部分)

(財)古都大宰府保存協会

# 太宰府の文化財

234

## 大野城跡大石垣

西暦665年  
大字坂本字口上谷所在

西暦665年、四王寺山山頂部を城域とする大野城が造られました。いわゆる城壁は土塁と石垣とから成り立ち、その構造は尾根に沿って土塁を巡らし、谷の部分は石垣を

築きました。その総延長は約8kmにわたり、城の南側と北側は二重城壁になっています。今取り上げる大石垣は5カ所知られる石垣の一つで、百間石垣に次ぐ規模です。場

所は南側の二重になった城壁の外側部分の一画を占めています。石垣は谷を塞ぐように尾根から谷にかけてV字状に築かれていて、現在残りが良い所で8mくらいの高さがあります。長さは64m残っています。崩れた跡もあり、江戸時代の「筑前国統風土記」には「石垣の高二三間、長七八十間」と記されているのが参考になるかもしれません。

ところで山道が石垣を斜めに切っていることから、そこに城門があったのではないかと考えられていましたが、調査の結果、後世、道を造るために石垣を切ったことがわかり、本来は完全に谷を塞いだ石垣だったのです。石の積み方は、まず谷間を乱石で堰き止めて、水が自然

に石のすきまを通って流れるようにし、その上に石を積み上げていっています。上部の幅は約4mです。このような大石垣でしたが、昨年7月の豪雨による土石流のため、谷の部分の石垣は壊滅状態になりました。遺跡を保存する難しさを感じます。(財)古都大宰府保存協会



▲大石垣 (平成15年7月19日の災害以前の状況)



▲大石垣 (平成15年7月19日の災害後の状況)

## 百間石垣

### 宇美町大字四王寺所在

大石垣の反対側、北側の二重城壁の内部土塁線にあります。名のとおり全長約百間に近い150mを測り、大野城で一番大きな石垣です。

石積の方法は、大石垣と異なって根石を置き、その上に石を積み上げて石垣を築き、石垣と後の地山の間を裏込として粘土と栗石を使った練瓦を施しています。

山肌を縫って続く石垣は壮観です。



# 太宰府の文化財

235

## 文字瓦 (「安楽寺三重□塔」銘)

平安時代後期  
太宰府天満宮境内および周辺出土



▲「安楽寺三重□塔」銘の文字瓦

文字瓦とは、文字が書かれている瓦の総称です。その多くが、焼く前の軟らかい状態の時にいろんな方法で文字を刻するのですが、今回は粘土を叩き締めて瓦の形にする時に使う叩き板に文字を刻んで、それで叩いて瓦に文字を

付けたものです。

写真と拓本①そして拓本②の2種類の瓦が、最近太宰府天満宮参道近くの発掘現場から出土しました。拓本①の瓦には「安楽寺参重□(塔)」、②の瓦には「(安)楽寺 天承二年/歳次壬子」と型押しさ



▲拓本①(「安楽寺三重□塔」銘の文字瓦)



▲拓本②(「天承二年」銘の文字瓦)

れています。これらの瓦片は以前、天満宮の境内からも出土し、注目されていましたが、「安楽寺参重□塔」とはつきり安楽寺の文字が読める瓦が出土したのは初めてです。これから安楽寺に三重塔が建っていたこと、そしてこの瓦の製造時期は平安後期だそうですね。三重塔は平安後期に建立されたか、補修、改修されたのではないかと推定に至ります。

そこに興味深い史料があります。原型は鎌倉中期に作られたと考えられる「天満宮安楽寺草創日記」で、それには安楽寺(現在の太宰府天満宮)のお堂が、いつ、誰によって建てられたかなどが書かれています。その中に、「新三重塔(中略)七条女院御願建永元五月寄進(後略)」という記事があります。建永元年は1206年で鎌倉初期です。つまり鎌倉時代の建永元年に新しい三重塔が七条院の祈願所として寄進されたという記事です。その新という字に注目すると、旧、すなわちこれより古い三重塔があったということを示唆しているのではないかと考えることが出来ます。すると、文字瓦から平安後期には三重塔が建っていた(旧塔にあてられるか)と推

測したことが、他の史料でも矛盾しない推定になって来ました。また逆に、この瓦の出土で、「草創日記」が新を記した意味が生きてくるでしょう。ちなみに七条女院とは藤原殖子(1157~1228)で、後高倉院と後鳥羽天皇の母です。後鳥羽天皇から多くの莊園を譲られ、当代一級の財力を誇りました。皇室や朝廷の息災や天下泰平を祈る祈願所建立も5カ所に及び、安楽寺の三重塔もその一つです。他の四つが京の近くであったのに対し、一つ安楽寺が選ばれたのは平安時代以来、天皇や貴族の保護を受けて繁栄してきた歴史からでしょうか。

最後に拓本②の天承二年銘の瓦からは平安時代後期の1132年にこの瓦を葺いた建物があったという事はわかりますが、「草創日記」に載る平安中期以降盛んなお堂の建立寄進の一つだったであろうかと想像するのみです。

(財)古部太宰府保存協会

# 太宰府の文化財

(236)

## 絵馬「富岳図」 一面

大正4年 萱島秀山画 坂本八幡宮所在

大正4年(1915)11月 の端には秀山と落款があり、に奉納された富士山と日の出 この絵馬を描いたのは萱島秀と松が描かれた絵馬です。絵 山だったことがわかります。



▲縦81.7cm 横111.7cm 枠幅10cm 板地着色

秀山は太宰府で数代続く絵師萱島家の二代目で明治から昭和の初めまで活躍しました。

本名は源太郎といい、安政5年(1858)生まれ。漢字と書を太宰府の儒学者本田竹堂や太宰府天満宮の神職にもなつた上野芳草、さらに中村徳山に学び、絵は博多の石丸僊舟、長崎の小曾根乾堂、牛島柳橋、日田の平野五岳、東京で豊島海城、荒木寛畝に学び、太宰府の吉嗣榊仙にも師事しています。また、秀山は20代後半から郵便局長として長年その任に当たりながらの画業でした。それでも各地の展覧会などに出品し、入賞するなど活躍し、太宰府や福岡に天皇や皇族が巡行の折には御前揮毫や絵を献上することも度々でした。

坂本八幡宮のこの絵馬は、秀山57歳の作品で、郵便局長の仕事も画作も一番忙しい時期だったのではないでしょうか。

秀山の絵馬は市内だけでもここ以外、竈門神社北谷遥拝所、太宰府天満宮、日吉神社で見ることが出来ます。

ところで、秀山が師事した人たちは皆、一家を成すようなすこい人たちでした。例えば長崎の小曾根乾堂は、勝海舟や坂本龍馬を後援し、外人居留地小曾根町を埋め立てて造成するなどの豪商であるとともに、書画や月琴の演奏にも優れた文人でした。また篆刻も良くし、明治4年には大日本国璽と天皇御璽を刻んでいます。秀山が絵を描く傍ら、篆刻に親しんだのも乾堂の影響でしょうか。

東京で師事した荒木寛畝は、国内外の展覧会で受賞し、東京美術学校(現在の東京芸術大学)その他の学校で教鞭を執り、また文部省の美術展審査員に任せられるなど、花鳥画の大家で美術界の重鎮にもなつた人です。

日田の平野五岳も詩に長じ、書も画も人々が争ってこれを超えるほどの人でした。

(財)古都太宰府保存協会

## 梵鐘

この度、佐世保市から高速船で約1時間、五島列島の最北端にある宇久島を訪問する機会を得た。宇久町の面積は太宰府市と同程度だが、人口は三千八百人弱である。

そこでは国が推進する「平成の大合併」、三位一体改革など、直面する課題が凝縮された姿を見ることができた。

昭和30年代までは、農・漁業で島を支えることができたが、経済の発展とともに島経済が崩壊し、人口も三分の一まで減少した。

島の財政は、地方交付税と期限切れを迎えた離島振興法による補助金に支えられてきた。幸い離島振興法は平成25年度まで延長されたが、自然豊かな町が将来を考え選択したのは、佐世保市との合併である。本市も例外ではない。今、行政、議会、市民が一体となり、行政改革に取り組みなければ将来展望は描けない時期に来ている。

(可)

# 太宰府の文化財

(237)

## 坂本八幡宮の絵馬

前月に続いて坂本八幡宮に掲げである絵馬をご紹介します。

### ①日清戦争下関条約締結図

明治31年 坂本区仲老連中

明治28年4月に行われた日清戦争の講話条約調印の場面を描いたものと思われま



▲① 縦94.8cm 横134.3cm 枠幅11.5cm 板地著色

場所は下関の春帆楼。日本側は伊藤博文・陸奥宗光、清国側は李鴻章・李経方の全権ほか向き合い、遼東半島や台湾の割譲、賠償金などの交渉をしているところでしょうか。戦争の戦闘場面や下関条約締

結の場面を描いた絵馬がよく奉納されたのでしょうか、坂本八幡宮以外でも近隣の神社などで散見されます。

奉納した仲老連中というのは若者組・青年会の次の年齢集団で、41歳の厄入りまでというところもありました。坂本地区での詳しいことはわかりませんが、明治36年の絵馬②に書かれた名前を調べると、20代後半から上の人たちが一家の中心的働き手として、家



▲② 縦94.4cm 横133.4cm 枠幅11.3cm 板地著色

も地域も支えていた年齢層ではないかと想像します。

### ②合戦図

明治36年 坂本区仲老連中

①の下関条約の絵馬と同様、仲老連が奉納したもので、20名の人々の名前が書かれています。

図柄は武者の合戦の図ですが、何を題材としたものか、よくわかりません。武者が背負っている旗指物の印も調べてみましたが、はつきりしません。崖から下り降りて来たような姿、後の方では海(カ)から上つて来ていると思われる武者の姿も描かれています。「新田義貞の鎌倉攻め」、旗印が違

う、旗印の紋(釘抜紋カ)を手懸りにすると、秀吉の小田原攻めの先陣を切った

一柳氏など考えましたが、これ以上わかりません。どなたかご存知の方は教えてください。

### ③本能寺変図

近代(年不詳)

明智光秀が織田信長を襲撃した本能寺の変を描いたものと思われませんが、残念ながらいつ頃、誰が奉納したものか枠の字が読めなくなっているのでわかりません。

(附)古都大宰府保存協会



▲③ 縦96.3cm 横133cm 枠幅10cm 板地著色

# 太宰府の文化財

238

## 坂本八幡宮の絵馬



▲① 縦103.2cm 横189.7cm  
枠幅9.8cm 板地著色



◀② 縦125.7cm 横103.4cm  
枠幅9.8cm 板地墨書 著色

今回も坂本八幡宮の絵馬を紹介します。

### ①伊勢神宮社殿図

昭和29年 萱島秀峰筆

伊勢神宮に参拝した記念に奉納された絵馬で、18人の同行者の名がずらりと書き連ねてあります。

絵は伊勢神宮の社殿や鳥居を風景画風に描いたもので、太宰府の絵師萱島秀峰の筆です。

秀峰は1月1日号で紹介した萱島秀山の三男です。明治34年(1901)生まれ。10

歳の時、病のために聴覚を失いますが、18歳の時に太宰府天満宮の文書館で画会(個展)を開くなど、早くから画家としての才能を発揮し始めます。

20歳には、名古屋の南画家石川柳城に作画の心構えとして重要な六法を学んでいます。

六法とは気運生動(きうんせいどう)―画中に風格気品がいきいきと充ちあふれていること、骨法用筆(こつぽうようひつ)―画の骨格をなす線には筆力を発揮すべきこと、応物写形(おうぶつしゃがう)―内外両面の実態を写しとらえること、随類賦彩(ずいるいふじさい)―対象に即して彩色すること、経営位置(けいぎょういち)―構図を考えること、伝模移写(でんもいせう)―先人の画を模写して技倆を磨く、の六箇条を言います。

その後、いろいろな皇族の前で揮毫したり、戦後は、昭和天皇・皇后の有田

焼視察の際に憲元から献上する大花瓶の図案を描いたりしました。

### ②延寿番附(鶴亀図)

昭和29年 萱島秀峰筆

昭和44年からは博多どんたくの源流で、どんたくパレードの先頭を歩く博多松囃子の黒流の傘鉦の絵を描くようになり、死後は子息により引き継がれ今日に至っています。また天満宮の干支の絵馬の原画も秀峰以来のものです。

昭和48年、71歳で亡くなりました。

これも秀峰が書と画を描き、伊勢神宮の絵馬(3月奉納)と同年の10月に奉納されました。

還暦以上の長寿の方々の名を男女に分けて相撲の番付表よろしく横綱から前頭までに当てて並べています。そして中央の天地には長寿の象徴の鶴と亀を描きました。なつかしい名前が並んでいるのではありませんか。

(財)古都太宰府保存協会



# 太宰府の文化財

(239)

## 坂本八幡宮の絵馬

坂本八幡宮の絵馬の最後で  
す。

### ①物語図

昭和5年

板が割れて、あまりいい状態ではないのですが、昭和初



▲① 縦72.3cm 横102.2cm 枠幅10.2cm 板地著色

めの札打ち（まが）に関係する絵馬なので、ご紹介します。

昭和初期まで、旧水城村一円では、15〜16歳から嫁入り前までの娘が参加する札打ちという行事がありました。現



▲② 縦102.5cm 横179cm 枠幅9.5cm 板地著色

在の太宰府市、筑紫野市、大野城市が含まれる旧御笠郡内の観音霊場33カ所を巡礼して歩くのです。郡中札打ち（むちま）とか、御笠札（ごかさ）、お札打ち（まが）と呼んでいました。4〜5年に一度、村内で、年頃の娘が十数人揃（も）つたら、春3月のお彼岸のころ、先達（さきだち）さんに連れられて3泊4日の日程で巡礼します。出発前にご詠歌や鈴（かね）の

振り方を練習して、揃（も）いの装束で巡りました。

先達さんは男性で、ほかに娘たちの親もついて行くこともあったそうです。

この坂本八幡の絵馬も昭和5年に郡中・御笠郡内の33カ所と一緒に巡拝した人たちが奉納したものです。奉納した時期の4月というのは、巡礼が無事終わった後に当たるでしょうから、3月の彼岸のころに札打ちが行われたという話に合います。

また、下の枠には先達1人の名と男性7人、女性24人の名前が並んでいます。坂本の方にお尋ねしたら、父親と娘の関係になる名前がありましたので、恐らく、男性7人は女性たちの父親だった人たちではないでしょうか。「娘たちの親もついて行くことがあった」という民俗調査で聞いたことを実際に裏付ける貴重な絵馬ということができません。熊谷直実と平敦盛の図で

しょうか。

### ②神功皇后伝絵

幕末〜明治初期 蓋島鶴栖筆

大きな絵馬です。残念ながら画面は薄くなって、かすかにしか見えませんが、いわゆる神功皇后の三韓出兵を描いたものです。

これを描いた蓋島鶴栖は1月号で紹介した秀山の父、前回の秀峰の祖父にあたります。文政10年（1827）に生まれ、画は斎藤秋圃、桑原鳳井、石丸春牛そして京都の前田暢堂（まへだちやうどう）に学んだということです。

その後秋月藩主に目をかけられ屏風を描いたり、幕末、太宰府に居た三条実美（みづの）など五脚（ごきゃく）とも親しく交わって作品を創っています。

鶴栖の作品は現在あまりたくさん残っていませんので、薄くなったといえ、この絵馬は貴重なものです。

最後になりましたが、氏子の皆様、ご協力ありがとうございました。

(財)古都太宰府保存協会

# 太宰府の文化財

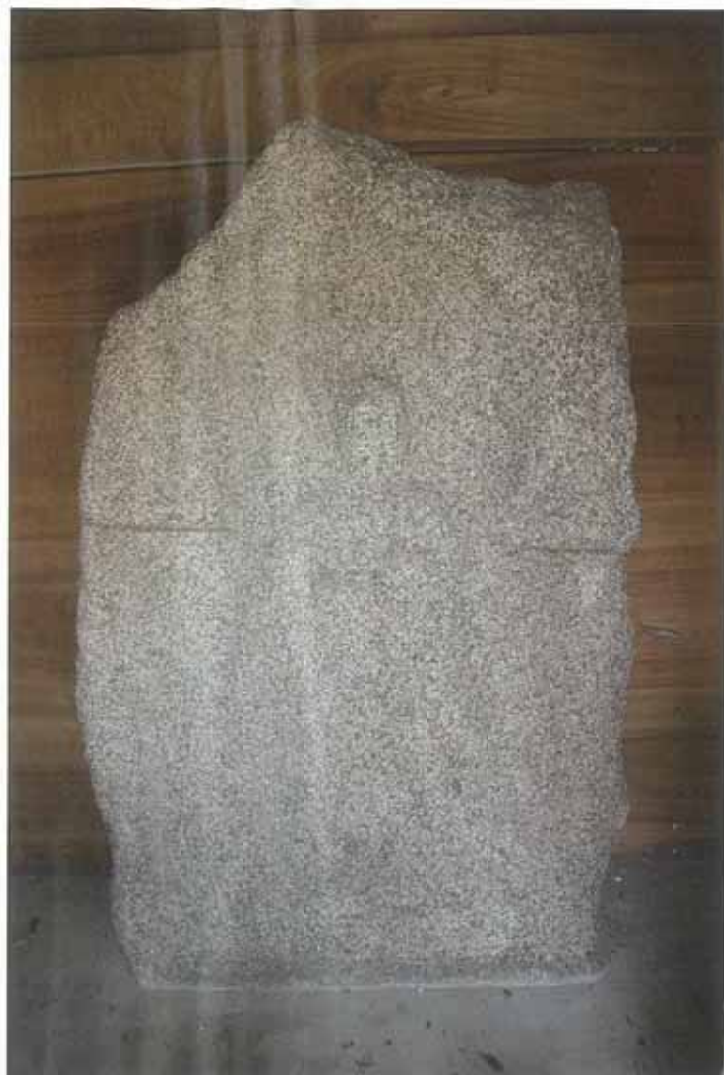
240

## 榎社境内の板碑(紅姫の供養塔)

南北朝～室町時代  
図像高(円光～蓮台) 81cm

榎社のお社の後に立つ小さな祠の中に祀られています。一般には紅姫の供養塔と呼ばれ、菅原道真が京より伴つて

来たという二人の幼子の一人、紅姫を祀っているといわれるものです。形は板碑といわれる形態で



石を板状に造って、仏像を刻んだり、仏を表わす文字(種子)や銘文を刻んで立てます。これは花崗岩の自然石に半肉彫りで仏像が彫られています。さて、その仏像がどんな仏様かということなのですが、風化のため、像が薄くなっているのなかなか特定が難しいのです。一説には、阿弥陀来迎像で

はないかといわれています。阿弥陀来迎像(図)とは、臨終の時、阿弥陀如来が臨終者を極楽浄土に往生させるため、天上から瑞雲に乗って迎えに来る、その有様を画いたもので、平安時代後期くらいから描かれるようになります。絵の特徴としては、西方浄土から来るので、少し斜めを向いた姿で、衣の裾がなびき、雲に乗っています。

このような来迎図の特徴から見ると、榎社の板碑の仏様は、顔を少し横に向け、着ている衣の裾がなびいている(向かって右方向へ)ので、来迎の形ではないかと考えられたのです。

もう一つは地藏菩薩像ではないかというものです。右手に錫杖を持ち、左手の上には宝珠を載せ、蓮華座の上に立つ姿です。太宰府では類例を見ないので、佐賀県の鳥栖市や三養基郡の町々にはお地藏様を彫った板碑が十数基あり、中に少し横を向いて、

衣の裾をなびかせて立っている地藏像の例が見られます。他には久留米市でも見られます。従ってこの像もお地藏様の可能性はあります。

また以前撮ったこの像の写真を見ると仏様が立っているのは、雲というより、どちらかといえば蓮華座と見た方がいいような形です。そして仏様の頭も坊主頭(僧形)で、地藏尊と見た方がすっきりするかなーとも思えます。

断定は出来ませんが、地藏菩薩を彫った板碑と見た方がいいような気がします。

なお、銘文がないので、いつごろ、誰が造ったのか、わかりませんが、板碑という形式が鎌倉時代から行われるようになったものですし、先述の佐賀や久留米の例を見ても、南北朝から室町時代にかけてのものですし、これもそのころのものと考えられています。表情は見えませんが、それでもやさしさが感じられるのはどうしてでしょうか。